

人類学における理論と研究の蓄積について

— ティヴの経済をめぐる研究史の検討から —

中尾 世治*

人類学と関連諸学では、1980年代以降、さまざまな「転回」が提唱され、研究の蓄積よりも断絶のほうが強調されてきた。そうした現状を踏まえて、本稿では、ナイジェリアのティヴの経済についての研究史を題材として、人類学における理論と研究の蓄積がどのようにありうるかについての検討をおこなう。具体的には、ティヴの経済を扱ったボハナンとそれ以降の研究について、個々の研究の叙述をまとめたうえで、理論の変遷を辿るのではなく、民族誌的な記述のどのような点が批判され、あるいは再解釈されたのかに焦点をあてて、歴史観と概念という2点の理論についての検討をおこなう。そして、それらの検討から、歴史観と概念という2つの理論が新たなものになることで、強調されたり、言及されたりする民族誌的記述の範囲が変容すること、その変容に伴って新たな一次資料による民族誌的記述が付加されること、そして、そうした既存の民族誌的記述の再整理から概念の拡張がなされることを明らかにした。最後に、これらの含意として、既存の民族誌的記述の強調や組織化という点での変更をおさえることで、新たな理論として提示される概念や歴史観が、どのような意味において新しいのかを明らかにしうることを述べた。

キーワード

人類学理論、経済人類学、ティヴ、グレーバー、負債

目次

I はじめに	III 人類学における理論と研究の蓄積
II ティヴの経済をめぐる研究史	1 歴史観
1 ボハナンによるティヴの経済：交換の3つの領域	2 概念
2 植民地経済以前のティヴにおける交易ネットワーク	3 人類学における理論と研究の蓄積について
3 グイヤーとグレーバーによる再解釈	IV 結論

I はじめに

現在、人類学の理論とは、どのようなものであるのか。人類学の理論は、人類の普遍的な特徴を明らかにしたり、世界のさまざまな人びとのふるまいや事象を

比較したりするものではなくなっている。一般的にいえば、人類学では、1980年代以降、「60年代以降の人類学における理論」(Ortner 1984)、『文化を書く』(クリフォードとマーカス 1996)、『文化批判としての人類学』(マーカスとフィッシャー 1989)などを経て、

* 京都大学大学院

単一のパラダイムの共有、事象に対する一般化された説明を必要とする普遍的な問い、地域や時代を超えた比較研究は、懐疑的にみられるようになった (e.g., 出口 2003: 215; Ellen 2010: 388-389)。

そのような普遍・一般性・比較に対する懐疑を経たのち、現在、人類学の理論¹のあり方は、およそ4つにわけられるように思われる。(1)概念、(2)歴史観、(3)観察・記述・分析の統合、(4)法則である。(1)概念は、ジェンダーやグローバルなどの概念によって対象の説明や「ゆるやかな」比較を可能にしている² (Moore 2004: 73-74)。身体、人格、贈与、言説的伝統、道徳などの概念をキー概念として用いて、民族誌的記述の説明をするあり方である。(2)歴史観は、部分的に概念と重なっているが、さまざまなフィールドに共通する歴史の枠組みを提供し、対象の説明や、歴史の枠組みそのものの検討を可能としている。古くは世界システム論 (ウォーラステイン 1981) などがあり、最近のものとしては、グローバリゼーション (アパデュライ 2004)、負債の歴史 (グレーバー 2016) などが、これに当てはまる。(3)観察・記述・分析の統合では、観察・記述と分析が不可分なものとなし、観察・記述・分析の方法を提供するものである。早期に自律的な理論を構築したエスノメソドロジー (e.g., 前田ほか 2007) に加え、言語ゲームとしての文化 (中川 1992; 浜本 2001)、人類学における存在論 (Kohn 2015)、アクターネットワーク理論 (ラトゥール 2019) が、それぞれの立場は異なるが、観察・記述・分析の統合という点では共通している。(4)法則については、代表的なものは生物進化の理論を基礎として、主として認知や宗教などの文化的な事象についての一般化された説明を提供しようとする理論である。人類学においては、古くはスペルベルの「表象の疫学モデル」があげられるが (スペルベル 2001)、近年は心理学を中心とした横断的な研究がなされている (e.g., Boyer and Bergstrom 2008; Hobson et al. 2018)。(4)法則は他の理論のあり方と離れているが、(1)、(2)、(3)については、(エスノメソドロジーを例外として) 複数の理論のあり方が重ね合わされて用いられている。

こうした人類学における4つの理論のあり方は (理

論の中身は変わっているものの)、1980年代以前から現在まで連続している。しかし、1980年代ごろから、特に2000年代以降、人類学と関連諸学では、複数の転回が生じたと言われている。こうした転回では、言語論的転回のように、それ以前の学問の前提となる考え方が大きく変化たとされている。具体的には、文学論的転回 (Scholte 1987)、文化論的転回 (Cosgrove and Jackson 1987; 森 2006)、情動論的転回 (Athanasios et al. 2008) 空間論的転回 (Knott 2010)、再帰論的転回 (Venkatesh 2013)、物質論的転回 (Hazard 2013)、民族誌的転回 (Grimshaw and Ravetz 2015)、存在論的転回 (Holbraad and Pedersen 2017) などの複数の転回が生じ、場合によっては、それらの転回は互いに重なりあっている。理論の新規性を強調するために、転回概念が用いられるのであるが、このような断絶の強調は、人類学における研究の蓄積をわかりにくくしてしまっている。もし仮に頻りに転回が生じているのであれば、研究は展開ごとに断絶し、何らの蓄積も生みださなくなってしまう。このような状況にあって、新規性を打ち出すための断絶だけではなく、継続的な発展を示すために人類学における研究の蓄積のあり方についても論じられる必要があるだろう。それでは、人類学において、どのように研究は蓄積され、どのように理論は精緻化されていくのであろうか。

この問いに答えるために、本稿ではナイジェリアのティヴの経済についての研究史をとりあげる。本稿では、あえて理論の変遷として研究史を辿ることをせず、民族誌的な記述がどのような点で批判され、あるいは再解釈されたのかに焦点をあてる。言い換えれば、特定の理論の出自を明らかにしたり、その理論の主張する先行の理論との差異の強調をなぞったりすることはしない。このような理論の変遷として研究史を辿ることは、研究史を新たな理論による「乗り越え」の歴史として提示するようにしてしまう。そのような理論の「乗り越え」の歴史ではなく、本稿では、具体的な事例において批判された点と引き継がれた点を吟味することで、人類学における理論と研究の蓄積がいかなるものであるのかを論じることとしたい。

こうした検討のための好例が、現在のナイジェリア

1 なお、本稿では、理論を、データについて、データよりも少ない語によって、説明し、解釈することを可能にする枠組みと定義する (Ellen 2010: 390)。

2 ムーアは概念メタファー (concept-metaphor) としているが、メタファーという概念自体が多義的であるため、ここでは概念とした (Moore 2004)。

のティヴの（植民地統治以前の）経済である。1950年代のボハナンによる研究以降（Bohannan 1955, 1959a）、ティヴの経済は経済人類学における古典的な事例となっている³。このボハナンの研究は、1960年代に最高潮を迎えた「経済人類学の黄金期」（ハンとハート 2017: 87）に多く論じられたものであった。この時期になされた、いわゆる形式-実体論争に代表される広範な議論によって、経済への人類学的な独自のアプローチが確立され、経済人類学が他分野への影響をもつことになった。特に、形式-実体論争では、経済が社会に埋め込まれたものとしてあるとみなす実体主義と、社会に埋め込まれたようにみえる行為もまた、経済合理性によって説明されるとみなす形式主義との立場の相違が示され、両者が平行線のままに議論を展開した（ハンとハート 2017: 89-106）。それと同時に、一般的には、形式-実体論争は「結論が出ないままに行き詰まりを迎え」たとされ、「30年にわたる新自由主義的なグローバリゼーションの時代へと続いていく」とされる（ハンとハート 2017: 19）。たしかに、ハンとハートのいうように、形式-実体論争は袋小路に入ったように見える⁴。1950年代から1960年代の経済人類学の議論は、その後の研究とは異なったかたちで展開していったようにも捉えられる。しかし、さきに述べたように、このような断絶の強調は、人類学における研究の蓄積を捉えがたくし、理論の精緻化のあり方を覆い隠してしまう。たとえば、ハンとハートは、1970年代以降の経済人類学を文化論的転回としてまとめているが（ハンとハート 2017: 126-132）、そうした転回という表現は、過度に新規性を強調するあまり、人類学のなかでの理論の精緻化や研究の蓄積をわかりにくくしている。本稿で述べるように、実際には、ティヴの経済についての研究は累積的に発展しているが、

一般的にはそのように理解されていない。

こうしたことを踏まえつつ、本稿では、ボハナンによって論じられたティヴの経済をめぐる学説史を検討し、人類学における理論と研究の蓄積がいかなるものであったのかについて述べる。具体的には、第2章で、1950年代のボハナンの論文、1970年代のボハナンに対する批判と2000年代以降の再解釈をまとめる。そのうえで、第3章では、それぞれの議論がどのように展開され、理論として、どのようにまとめられていったのかを論じる。そして、ティヴの経済をめぐる研究史から、人類学における理論と研究の蓄積とはいかなるものであるのかについて述べる。

II ティヴの経済をめぐる研究史

ボハナンによるナイジェリアのティヴの経済の論文は（Bohannan 1955, 1959a）、形式-実体論争が華々しく展開されていた時代から、経済が社会に埋め込まれているという実体主義の立場をよく示すものとして、しばしば引用されてきた（e.g., Dalton 1961: 14, 20-21; Godelier 1965: 53, 73）。また、現在でも、そうしたかたちで、ボハナンの研究は形式-実体論争のなかで言及されることが一般的である（e.g., Maurer 2006: 20; ハンとハート 2017: 92）。しかし、1970年代に入ると、ボハナンは西アフリカの歴史研究者から痛烈な批判にさらされる。ボハナンの観察していたティヴ社会もまた、歴史的にあって、市場経済と深く結びついており、ボハナンのいくつかの想定が崩されることになる（Latham 1971; Dorward 1976）。ボハナンに対する評価は定まったかのようにみえたが、その後、人類学者のグイヤーとグレーバーが、こうした歴史研究の成果を踏まえたボハナンの再解釈を示すことになる（Guyer

3 第2章第2節で詳述するように、ボハナンの見解は1970年代の西アフリカの経済史研究によって大きく修正されることになる。しかし、このことをもって、ボハナンの研究の意義が無効化されたとみなすのは短絡である。第2章第3節で述べるように、ボハナンの民族誌的記述は、西アフリカの経済史研究の成果を踏まえたグイヤーとグレーバーによって、再解釈されるようになった。なお、本稿では十分に論じることができないが、ボハナンの民族誌的記述は、複数貨幣の併存状況を論じたものとして理解される必要がある。近年の西アフリカの経済人類学・経済史研究は、複数貨幣の併存状況を主題として論じており（e.g., Guyer 2012; Pallaver 2022; 筆者の論じたものとしては Nakao 2019; 中尾 2020: chap. 5）、ボハナンの民族誌的記述もまた、この文脈で本格的に再解釈できる可能性を有している。この点については、本稿の目的の範囲を越えるため、別稿で論じることとしたい。

4 形式-実体論争には、さまざまなレビューがあるが、この論争から理論的な含意を引き出そうとしたカリスカンとカロン（Çalışkan and Callon 2009）が有用である。カリスカンとカロンの指摘するように、形式主義と実体主義は、共通した理論的な課題を指し示している。両者ともに、何が経済の領域であり、何が経済の領域でないのか、という線引きの問題を提起しているのであり、行為の主体性（エージェンシー）を個人に配分するのか、制度に配分するのか、という行為の主体性をめぐる問題を提起している（Çalışkan and Callon 2009: 377）。一般的に、形式主義は、人類学のなかで過小評価されている。形式主義者とされたファースの意義については、高橋（2016: 60-65）を参照。ファースは、個人の行為主体性を見出そうとし、個人と文化のギャップを価値体系の変容の出発点として理解しようとしていた。なお、ニュージーランドで生まれ育ったファースについては、近年、ファースの個人文書を用いて、「ホームの人類学」の先駆者としての位置づけが論じられている（Laviolette 2020）。

2004; グレーバー 2016)。本章では、理論の変遷によって、かつての民族誌的な記述や議論が「乗り越えられる」のではなく、それぞれが民族誌的記述をどのように用いながら自らの論述をおこなってきたのかをまとめる。

1 ボハナンによるティヴの経済：交換の3つの領域

ティヴは、ナイジェリア中部のベヌエ中流域に居住する民族である。ボハナンは、この地域で1949年7月から1953年1月にかけて、計26か月間の調査をおこない、その調査をもとにティヴの経済について報告している(Bohannan 1955: 70)。ボハナンによれば、ティヴの経済は自給自足の農耕に基礎づけられており、ナイジェリアの南部と中部とを結ぶ市場のネットワークによって補完されている。「しかし、現在では、異なる行為・動機・考え方を要求する新しい経済システムによって、ティヴの経済的な交換についての考え方や、投資・経済的な富の増大についての伝統的な方法が弱体化している」(Bohannan 1955: 60)。つまり、ボハナンは、「伝統的な」経済活動や考え方が「新しい経済システム」によって、変容していると述べている。この両者の対比のなかで、「伝統的な」ものが叙述される。

ティヴにおける財の流通は、「贈与」と「市場」の2つの領域にわけられる。「贈与」は、多少なりとも長い付き合いのある個人ないしは集団のあいだで、長期にわたってなされる交換として位置づけられる。「贈与」は関係性をつよめたり、つくりあげたりする要因となりうるものである。そうした関係性のなかでなされるがゆえに、「贈与」では、「市場」での交換のように、贈られたものを数えたり、値切ったりすることは、悪しきこととみなされている。対照的に、「市場」は長い付き合いのない相手となされるもので、自らの利益を最大化するようにすべき取引である。そのため、人びとは親族関係にある者に売ることはできない(Bohannan 1955: 60)。

ティヴにおいて、交換可能なものは3つの異なる領域に属しており、それぞれの領域は多少なりとも排他的である。最も重要な領域は、ティヴで生産される食糧である。市場では、同じ領域のなかでの交換がなされ、たとえば、ヤマイモとモロコシが交換される。また、この領域には、食糧を生産するために必要な道具、さらにその道具をつくるための材料が含まれている。具体的には、農作物のほか、ニワトリとヤギ、道具(白、

播り鉢、瓢箪、籠、鍋、農耕具)、道具の原材料である。市場では、この領域のなかで交換がなされるため、たとえば、イモ類と穀類の交換、イモ類と鍋の交換などが、市場における通常の売買として考えられている(Bohannan 1955: 62)。これは生活にかかわる交換の領域といえるだろう。

第二の重要な領域は、奴隷、ウシ、トゥグドゥ(tugudu)と呼ばれる大きな白い布、真鍮棒(brass rods)である。ボハナンの調査時においてもすでに、真鍮棒は非常に稀少であり、奴隷制は法的に廃止されたが、この第二の領域は、人びとの考えのなかにいまだに強く根づいていたとされる。奴隷の価格はウシと真鍮棒で数えられ、ウシの値段は真鍮棒とトゥグドゥの布で数えられた(Bohannan 1955: 62)。これは威信にかかわる交換の領域である。

第三の領域は、奴隷以外の人間、特に女性である。この地域では、婚姻による女性の交換が望ましいものとされていた。妻として女性を受けとった側の家(新郎側の家)は、その成員内から女性を相手の家(新婦側の家)の結婚相手とするというものである。こうした婚姻による女性の交換は公的には(ボハナンの調査時から数えて)25年前に廃止されたが、その当時、ティヴのあいだでは、この領域の交換が最も感情的に揺さぶられる大きな関心事であった。この領域には、女性と子どもが含まれており、扶養者の領域として位置づけられる(Bohannan 1955: 62-63)。

これらの3つの交換の領域には、武器やト占などの専門的に用いられる道具などが含まれていない。こうしたものは、一般的に交換されない。労働や奉仕もまた、これらの領域には入らない。労働や奉仕は概して、互酬的なものであり、年齢階梯、親族関係、世帯集団の構造や道徳の一部をなしている。これらを「交換」と捉えることは失礼で不適切であると考えられていた。最後に、土地も交換の対象に含まれていない。土地は他の土地との交換も含めて、いっさい交換することができないものであった(Bohannan 1955: 63)。

さて、交換可能なものについての3つの領域は、道徳的な価値づけによって、優劣の序列がつけられている。第二の威信にかかわる領域は、第一の生活にかかわる領域よりも上位に位置づけられている。そして、第三の扶養者にかかわる領域は、第一と第二の領域に優越している。つまり、生活の財を十分に満たすだけでなく、威信財を保有しているほうが望ましく、さらには威信財だけではなく、多くの扶養者を有している

ほうが望ましいという道徳的な価値づけによって、3つの領域間の優劣が生じている (Bohannan 1955: 64)。

そのために、別の領域に属するものの交換は一方的のものが良きものとされる。真鍮棒を得るために、食糧を渡すことは良いが、真鍮棒を食糧に変えることは悪いこととされる。また、妻を得るために、ウシや真鍮棒を差し出すことは良いが、ウシや真鍮棒のために、結婚することは非常に悪いこととされる。つまり、下位の領域から上位の領域へのものの交換が望ましいとされ、その逆は望ましくないものとされるのである。そして、領域内での交換は交換者の運に左右されるものとみなされるが、上位の領域への交換は、投資の能力、引きの強さ、「強心臓」が必要されるとみなされている (Bohannan 1955: 64-65)。

他方で、「かつては」上位の領域のものから下位の領域のものへの交換がなされていた。食糧不足や祝宴のために真鍮棒を食糧と交換することがあり、やはり、同様の理由で、奴隷を食糧と交換することがあったという。さらには、ある資料では、あまりにひどい飢饉のため、最後の手段として、娘をよそ者に売り渡し、息子を生かすための食糧と交換したことが紹介されている (Bohannan 1955: 65)。

しかし、こうした3つの交換の領域と、それらの領域間の関係性の考え方は、「西洋のイデオロギーの衝撃」と「植民地経済と社会組織」によって、維持することができなくなった。この原因は、威信と扶養者の2つの領域が有効でなくなり、どの領域にも属さない多くの新しい商品が導入され、貨幣がそれまでには存在しなかった領域間の共通項となったことであるとしている (Bohannan 1955: 66-67)。

ボハナンは、1959年のアフリカ社会への貨幣の衝撃を論じた論文のなかで、特に真鍮棒の特殊性を指摘している。この論文では、1955年の論文と同様に、3つの交換の領域と、領域間の優劣をまとめたのちに、真鍮棒が、女性の交換による婚姻以外の婚姻で用いられ、食糧の購入のために用いられたこと、つまり、上位と下位の領域との交換がなされていることを再確認している (Bohannan 1959: 497)。そのうえで、真鍮棒が「一般的な通貨」(general currency) となりえなかったと述べている。真鍮棒は、分割することができず、食糧に対してはあまりにも高価であり、日常的な交換に適さないとする (Bohannan 1959: 497-498)。他方で、真鍮棒は、高価であるがゆえに、奴隷などの威信にかかわる第二の領域のものと交換され、その領域のなかで

は、価値の尺度手段であり、富の貯蓄手段であり、支払手段でもあった。その意味で、真鍮棒は、第二の威信の領域のなかでは一般目的貨幣であったが、他の領域との交換においては部分的な交換しかなされなかったために、特殊目的貨幣であるとされたのである (Bohannan 1959: 498-499)。

このようなボハナンの所論が、実体主義の好例として言及されたことは理解に難くない。短い論文のなかで、明瞭で論理的に、ティヴにおける経済の論理を示しており、市場における交換がまったく自由になされているわけではないことを具体的に明らかにしているからである。しかし、ボハナンのティヴの経済の理解は、ある意味では一面的なものであった。西アフリカの経済史研究の進展に伴い、1970年代に実証的な研究が積み重ねられるなかで、ボハナンの所論は大きく批判されることになる。

2 植民地経済以前のティヴにおける交易ネットワーク

ボハナンの所論のなかで、最初に批判されたのは、真鍮棒が一般目的貨幣ではないという主張であった。実際には、むしろ、金属の棒は広範な地域で一般目的貨幣として用いられていたのである。歴史学者のラタムによれば、ボハナンの調査地が金属の棒を貨幣として用いる地域の北端に位置しており、ボハナンが金属の棒を一般目的貨幣として捉えられなかったのは、彼が金属の棒を貨幣として用いなくなった時代に調査したことによる誤解であるとしている (Latham 1971: 600)。ラタムによれば、南に隣接していたクロスリバー地域では、18世紀から19世紀にかけて、食糧が金属の棒によって購入されていた。そして、こうした棒はいくつかの針金に分割され、小規模の取引にすら用いられていた。それだけではなく、こうした棒と針金の価格は、収穫の多寡、端境期や収穫期、戦争の影響を受けて変動していたのである (Latham 1971: 601-602)。

ラタムは、1930年代のティヴの辞書では、商品取引に用いられている針金が棒と区別されていることを引きつつ、ボハナンの調査した地域は、南のクロスリバー地域の状況と変わらなかったと指摘している (Latham 1971: 602)。ラタムが指摘するように、実際のところ、ボハナン自身も、のちの民族誌のなかで、棒が分割されうるものであったという1940年代の回想を記述していた (Bohannan and Bohannan 1968: 236; Latham 1971:

602)。

さらに、一般目的貨幣としての金属の棒は、18世紀半ばまでに信用取引を可能としていた。沿岸部のアフリカの商人たちは、ヨーロッパの商人に自らの息子を「担保」として、ヨーロッパからの輸入品を先に仕入れ、それを仲買人に売りさばき、仲買人が内地で「購入」した奴隷をヨーロッパの商人に売るという信用取引をおこなっていた。このシステムは奴隷貿易廃止以降の(いわゆる「合法」貿易時代の)19世紀のパーム油の取引においても継続された。このシステムでは、「担保」によって輸入品の先払いがなされていたのであるが、その輸入品も、後払いされる奴隷やパーム油も、金属の棒によって価格が計算されていた。ヨーロッパからの輸入品、奴隷、パーム油は、それぞれ異なる支払手段であるため、通約可能な価値の基準がなければ、信用取引は成立しない。金属の棒は、ヨーロッパの商人との取引においても用いられていたため、異なる支払手段の基準となる価値尺度を提供していたと捉えられるのである(Latham 1971: 602-603)。

そのうえで、ラタムは、威信と奴隷について、ボハ

ナンとは異なる解釈を示している。金属の棒は価値の貯蓄手段として用いられた一方で、生産部門への投資がなされなかったことを強調している。端的に言えば、パーム油の生産が投資によって組織化されることはなかったのである。ラタムは、これを商業的な流動性の高さによって、交易で利益を得た権力者たちが生産部門への投資を避けた結果として解釈している。そして、クロスリバー地域においては、商業的な流動性への備えを超える余剰分は、奴隷へと転換された。たとえば、この地域の最大の商人は交易で得た利益によって奴隷を大量に「購入」していたのである。これは、奴隷が労働力であり、転売可能であり、ステータスシンボルであったことによる合理的な行動として理解できる。つまり、金属の棒は一般目的貨幣であり、資本主義的な経済の発展を促進した一方で、商業的な流動性によって、生産部門への投資がなされず、余剰資本は奴隷へと転換されたのである(Latham 1971: 603-605)。ボハナンは「伝統的な」経済のあり方を、資本主義的な市場経済と対立するように捉えていたのであるが、ラタムは、威信の領域に位置づけられた奴隷の「購入」

を、商業的な流動性のなかでの経済合理的な選択として示しているといえるだろう。

このように、ラタムは、ボハナンによって示されたティヴの経済のイメージを刷新した。しかし一方で、実証という点で厳密に言えば、ラタムはティヴにおいて真鍮棒が分割されていたことの蓋然性の高さを示しただけであり、その他の記述は隣接する地域の事例となっている。そうしたなかで、植民地統治直前のティヴの経済をより広域の交易ネットワークのなかに位置づける経済史研究が、ドルワードによってなされた(Dorward 1976)。

まず、ドルワードは、ティヴランドが生態的に異なる南の森林地帯と北のサバンナを結ぶ複数の主要な交易路の横断する地域であったことを示す(図1)。北からは岩塩、奴隷、ウシ、ウマ、染織物(ハウサのインディゴ染め)、金属加工品やビーズなどの内地で生産された産品が、南の森林地帯で生産されたコーラの実と交換された(Dorward 1976: 577-580)。

ティヴランドは、こうした交易の中継

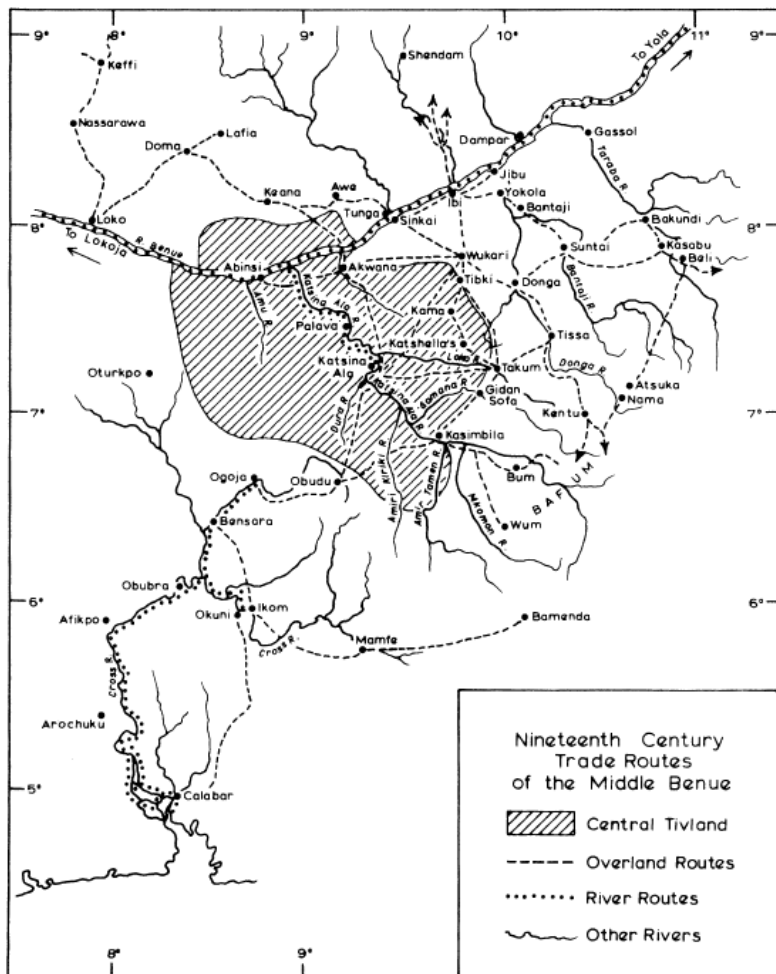


図1 19世紀のベヌエ川中流域における主要な交易路 (Dorward 1976: 578)

地であっただけではなく、綿布の生産地としても重要な地域であった。20世紀初頭の史料によれば、ティヴランドでは綿布の生産が相当量おこなわれており、これらは北のハウサの諸国や現在のカメルーン北西部のパメンダへと輸出されているだけでなく、この地域で通貨として用いられていた (Dorward 1976: 580-582)。布はおおまかに3種類の大きさによって区分され、交換の価値基準、支払手段、富の蓄積の手段として利用されていた。さらに、布は、奴隷、ウシ、鉄や真鍮棒などの威信財や妻の「購入」の際にも用いられており、ボハナンの示した領域を越えて一般目的貨幣として利用されていた (Dorward 1976: 583)。

布の貨幣としての価値は、複数の要因によって保持されていた。布は周辺地域での恒常的な需要をもつ輸出品であり、その輸出に対して過剰生産された布が貨幣として流通することで、需要に対する価格弾力性を有していた。また、布の生産には、機織りだけではなく、綿の洗浄や糸紡ぎなどの高い労働力が必要とされており、行き過ぎた過剰生産が生じないようにしていた。さらに、貨幣としての布の一時的な不足に対しては、金属の棒や針金が補助的な貨幣として用いられることで、その不足が緩和された。真鍮棒や針金が南部から輸入されていたのである (Dorward 1976: 582-585)。

他方で、布の生産には、多くの労働力を必要としたため、多くの奴隷や女性の「獲得」が経済的に有利な条件を生みだしており、こうした「獲得」に布が用いられた。また、移動と対外的なネットワークの構築にコストがかかることから、ティヴ自らは商業に従事せず、少数の外来者のハウサの商人が布の輸出を担っていた。ティヴの有力者は、こうした商人を庇護する見返りの贈答品や布の売却による富を利用し、権力の集中を図っていた (Dorward 1976: 586-589)。

さて、布の貨幣としての役割は、1920年代以降に、突如として失われるようになる。まず、徴税が開始され、当初は金属の棒による納税が認められたことで、大量の金属の棒が植民地行政に集められた。それが商人を介して、ティヴランドに還流したため、金属の棒の価値が広く共有されるようになった。また、近隣地域での布の輸出が増加し、ティヴランドに残る布の量が少なくなり、通貨としての布の名目価格が市場価格と乖離してしまった。さらに、納税の媒体が植民地通貨に代わり、鉄道建設による賃金労働、商品作物の生産が出現することによって、植民地通貨が、この地域

での貨幣の地位を有するようになった。ティヴにおける金属の棒の特権的な位置づけは、むしろ、植民地統治の確立期にあらわれた移行的な段階であったのである (Dorward 1976: 590-591)。

こうしたドルワードの研究を踏まえると、ボハナンが見聞きした範囲が限定的なものであったと言わざるをえないだろう。ドルワードは、ボハナンがティヴの経済の自給自足的な側面を強調しすぎ、外部との商業ネットワークやそのネットワークにつなぐハウサの商人を過小評価していたと指摘しているが (Dorward 1976: 589)、この点については、あらず余地がない。また「創られた伝統」の議論のように (ホブズボウムとレンジャー 1992)、ボハナンの捉えた「伝統的な」ティヴの経済が、植民地統治期の影響のなかで成立していたとも理解することができる。

このようにラタムとドルワードによる西アフリカの経済史研究によって、ボハナンの所論は実証的な意義を失ったかのようにみえる。しかし、あらためて冷静に考えると、そのすべてが実証的に否定された、というわけでもないことに留意する必要があるだろう。ラタムとドルワードは、ボハナンの議論の核心である交換の3つの領域を明示的に否定したわけではなかった。ラタムは、金属の棒が分割可能であり、領域を越えて交換されていたということを明らかにし、ドルワードは、そうした金属の棒の利用の以前には、布が貨幣として機能しており、金属の棒の貨幣としての利用は20世紀初頭の移行期に出現したものであったことを示したのである。それでは、ボハナンの示した民族誌的なデータは、どのように再解釈できるのか。形式-実体論争がすでに歴史となった2000年代に入ってから、2人の著名な人類学者がボハナンの再解釈を提示している。ひとはカメルーンを中心に西アフリカの経済人類学・経済史研究を広範におこなってきたグイヤーであり、もうひとはマダガスカルと国際的な反クローバリズム運動をフィールドとしたグレーバーである。

3 グイヤーとグレーバーによる再解釈

(1) グイヤーの「転換」

グイヤーの再解釈は、ボハナンと経済史研究 (ラタムやドルワード) の研究成果を整合的に結びつけ、ボハナンの用いた用語を、いわばより立体的で奥行きのあるものとした。まず、グイヤーは、ボハナンのいう3つの交換の領域を確認したうえで、領域間のものの移

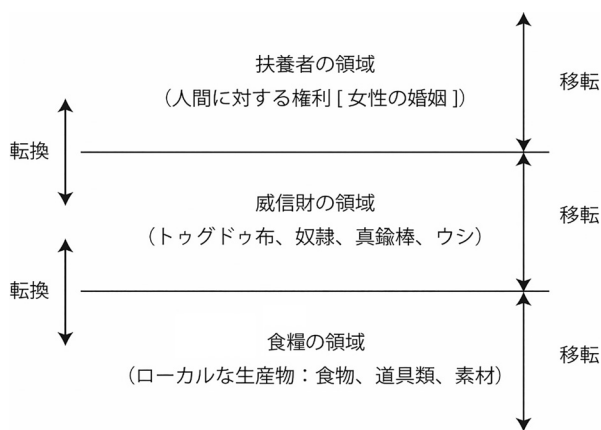


図2 ティヴにおける3つの交換の領域
(Guyer 2004: 29をもとに一部修正して筆者作成)

動により焦点をおいて、ボハナンの民族誌的記述を整理した。グイヤーは、ボハナンが必ずしも強調していなかった2つの用語を強調する。ひとつは領域内のものでの交換である「移転」(conveyance)であり、もうひとつは異なる領域のものを交換する「転換」(conversion)である (Guyer 2004: 28)。グイヤーは、これをわかりやすく、図化している (図2)。

グイヤーは、こうした交換の領域を道徳的な価値づけを伴った理念型であると指摘している。彼女は、異なる領域のものを交換する「転換」は、まれではあるものの実施されているというボハナンの記述を強調する。下位の領域のものを上位の領域のものと交換する「上位転換」(あるいは、「投資」)は目指されるものとされる一方で、上位の領域のものを下位の領域のものに交換する「下位転換」は望ましいものではないとされていた。つまり、一部の財を社会的・道徳的に許容されない方法で蓄積したり、再分配したりできないようにしている (Guyer 2004: 28)。

そのうえで、グイヤーは経済史研究を踏まえて、この交換の領域のモデルをより広い地域の交易と結びつけて論じている。まず、北と南の交易が対照的にまとめられる。ティヴランドで生産された綿布であるトゥグドゥは、交換の領域をまたいで用いられていた。綿布は威信財の領域にとどまらず、食糧の領域における日用品の購入だけでなく、花嫁代償として用いられ、扶養者(女性とその子ども)の領域のものとの交換にも利用されていた。そして、奴隷、象牙、コーラの実とともに、綿布は北部のハウサ諸国へと輸出され、北部からはウシ、ウマ、衣服、染織物、塩、ビーズが輸入された (Guyer 2004: 29)。

一方で、南部との交易では、ヨーロッパ製品、武器、

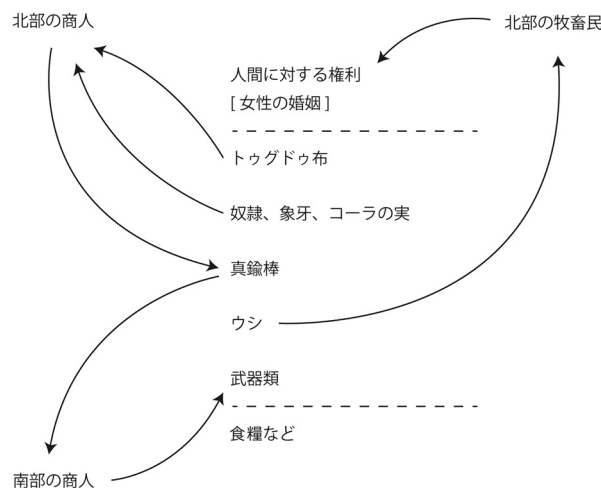


図3 ティヴにおける地域間交易のモデル
(Guyer 2004: 31をもとに一部修正して筆者作成)

弾薬が輸入された。他方で、北部の牧畜民ではウシが威信財として位置づけられており、牧畜民とのウシとの交換によって女性を妻として「獲得」することができた。北部ではティヴの綿布の需要が一定程度あったものの、南部ではそれほど大きな需要がなかった。こうした南部との交易では、南部で真鍮棒が通貨として利用されていたため、真鍮棒での支払いが選好されていた。グイヤーは、北部では真鍮棒が通貨として用いられていなかったために、ティヴは北部との交易によって真鍮棒を入手し、南部との取引に用いたのではないかと推測している (Guyer 2004: 28-29)。

このような地域間交易と交換の領域を図示したものが、図3である。グイヤーが強調するのは、威信財の領域内の「移転」が、地域間交易を可能にしているという点である。綿布は穀類やニワトリなどの安い価値を売ったり、あるいは外部との交易によってウシを売ったりすることで入手することができる。この綿布を真鍮棒やウシと交換することで、真鍮棒は南部との取引に転用でき、ウシは北部の牧畜民との取引に転用でき、綿布はこれら2つの異なる方向をもつ交易路と接続させるものとなっている (Guyer 2004: 30)。

ここからグイヤーは2つの理論的な含意を引き出している。ひとつは「転換」の定義の拡張である。「転換」は異なる交換の領域間のものとの交換を意味していたが、それだけではなく、「転換」は取引による道筋 (transactional pathways) のなかにある連結部として捉えることができる。「転換」の最も典型的な例が、綿布である。綿布は異なる交換の領域を行き来しているが、それは地域間交易によって得られた富を、扶養者の領域や食糧の領域へと「転換」するものとしても位

置づけられるからである (Guyer 2004: 30)。

もうひとつは、一方向的で、非対称的なものの流れである。図3に示されているように、地域間交易では非対称にものが流入し、流出していることがわかる。一般的に、贈与や交換の理論では、互酬性のように交換される2つのもの同士の均衡が基本的な前提となっている。しかし、ここでみてきたように、むしろ、交換は非対称的なものの流れのなかでなされているのである (Guyer 2004: 27, 30, 47)。ここからグイヤーは、異なる価値体系への「転換」がどのようになされているのかを、さらに論じていくのだが、ティヴの事例から離れるので、ここでは、この地点にとどめておこう。

グイヤーの白眉は、ボハナンの古典的な民族的記述と、その民族誌的記述の意義を否定するかのようと思われる後年の歴史研究の双方を丁寧に読み解き、整理しなおすことによって、特定の概念の新たな定義を提示するという理論の精緻化をおこなったことにある。後年の研究を実体主義の「乗り越え」といった「パラダイム転換」に還元せずに、否定されるべきものとそうではないものの差異を丹念に精査していったのである。

しかし、ティヴの経済についての再解釈は、ここにとどまらない。2010年代に入って、グレーバーが、また別様な再解釈をおこなっている。そこでは、グレーバーらしい大胆で全く異なる解釈が展開されることになる⁵。

(2) グレーバーの「人肉負債」

グレーバーの出発点は、人間は人間でしか交換できないということにある。妻を「獲得」するためになされる花嫁代償が要求される理由は、「どのような支払いも不可能なほどかけがえのない価値あるものを要求していることの承認」であるとされる。したがって、グレーバーは、ティヴの社会において婚姻が女性同士の交換を理想としていることの原因を、ある女性と引き換えに贈ることができるのは、もうひとつの別の女性であるという考え方にみている。たしかに、ティヴでは、真鍮棒やウシが花嫁代償として用いられることがあるが、それは清算不可能である負債の存在を承認

するために贈られるものとして解釈される。その根拠として、グレーバーは、ボハナンも参照しているティヴの知識人によって書かれた民族誌を参照して、花嫁代償としての支払いが永続的に続くことをあげている (グレーバー 2016: 200-203)。支払いが永続的なものとなるのは、女性との交換に対する対価は別の女性でしかないという原則があるとみなすのである。

しかし、他方で、ティヴの社会では、こうした負債を抜きに女性を「獲得」する、もうひとつの方法が存在していた。それが奴隷である。遠く離れた地域で、襲撃によって誘拐された女性であれば、「購入」することができた。これは、奴隷が親族関係から切り離されて、社会関係のネットワークから引き剥がされた存在であるからである (グレーバー 2016: 221-222)。そのうえで、グレーバーは、ボハナンのまとめた3つの交換の領域、異なる領域のものの交換 (グイヤーのいうところの「転換」) がなされることを整理する。そして、そうした「転換」が「強心臓」をもった野心家によってなされていたことを確認する (グレーバー 2016: 223)。

ここまでは、穏当なまとめなのだが、ここからグレーバーの才気がさえわたる。彼は、この野心家に着目して、ボハナンのティヴの経済の研究と妖術の研究の接点を見出す。交換の領域についてのボハナンの論文では、この野心家は「潜在的に悪魔となるような特別な能力 (ツァヴ *tsav*) をもった男として恐れられている」 (Bohannan 1955: 66)。そして、ティヴにおける妖術をあつかったボハナンののちの論文では、このツァヴがキー概念のひとつとしてあらわれる。「ティヴには、権力関係を論じるための明確な語彙あるいはメタファーがある。それがツァヴという語である。ツァヴとは一部の人びとの心臓で育つ実体をもったものである。ツァヴをもつ者は、人びとや一部のものをコントロールすること——「権力」をもつこと——ができるようになる。わずかな家畜や野生動物が時にはツァヴをもったり、「育てたり」すると表現されるが、ツァヴは本質的には人間にかかわるものである」 (Bohannan 1958: 3)。そして、ツァヴは人肉を食べることによって育つと考えられ、他人を支配する者はみなツァヴを

5 ここでとりあげるのは、グレーバーの『負債論』第6章のティヴについての論述である (グレーバー 2016: chap. 6)。グレーバーは『負債論』にさきだって、この第6章とほぼ同じ内容の論文を発表している (Graeber 2012)。ここでは、読解のために、2012年の論文と『負債論』第6章の双方を参照する。なお、『負債論』はあまりに広範な事柄を論じているため、ここでは、ティヴの経済についての再解釈に焦点を絞って論じる。

もっているとされる。植民地行政にかかわる者や長老たちはツァヴをもっており、こうした者たちは組織をもち、毎晩のように集まって死体を食べるために墓を暴いたり、あるいは、人肉を食べるように仕向けて、その見返りを要求する「人肉負債」(“flesh debts”)のネットワークがあると語られる。この「人肉負債」を負うと、唯一できることは自らの子どもか近親者を殺害して差し出すか、自分自身を捧げなければならないとされる(Bohannan 1958: 3-4)。

これらの民族誌的記述をまとめたのちに、グレーバーはつぎのように経済と妖術をつなげる。「『強心臓』を有した男たちは、力とカリスマをもっている。それを使って、彼らは負債を操作し、余分な食物を宝物に変え、宝物を妻、被後見人、娘に変え、こうして拡張しつづける家族の長となるのだ。だが、まさにそれを推進するのと同じ力とカリスマが、この過程全体を反転させ、おそるべき一種の内破に追いやってしまう。そんな危険はつきまとう。人肉負債をつくってしまい、家族を食物へと変身させてしまう危険である」(グレーバー 2016: 226)。

このような想像力は、ティヴの社会における政治システムにあるとグレーバーは見立てている。ティヴの社会においては、村を超えた権力関係はなく、それぞれの村では長老が権力をもっていた(Bohannan 1958: 6)。そのうえでグレーバーは、ティヴは「徹底的に平等主義的だった」と推論し、すべての男性が大家族の長となることを目指しながらも、主従関係にとてつもなく懐疑的であったとする。それであるがゆえに、権力を持ちすぎた者は怪物になりうると信じるようになったと主張する(グレーバー 2016: 227)。

さらにグレーバーは、こうした想像力が、なぜ「人肉負債」という負債の観念によって枠づけられているのかを問う。結論からいえば、自分の子どもや自分の身体で負債を返済しなければならないという強迫観念は、沿岸部で生じていた奴隷貿易と人質の信用取引に由来するものであるとグレーバーは推測している。グレーバーは、上述のラタムやその後の西アフリカの経済史研究を参照しつつ、人質を担保とした信用取引の制度を概観する。そのうえで、クロスリバー地域での商人たちの秘密結社であるエクペに焦点をあてる。この秘密結社は債務をとりたてる組織であるとともに、秘密結社での入会金が非常に高額に設定され、入会は名誉であると同時に負債をおうものとなっていた。つまり、エクペという秘密結社のメンバーは、負債を負

う債務者であると同時に、債権回収者であり、債務者は自らの子どもを人質に出したり、あるいは自ら自身を奴隷とすることになったのである。このエクペのあり方がティヴにおける「人肉負債」の観念と重なる、というのがグレーバーの指摘である(グレーバー 2016: 226-235)。たしかに、「人肉負債」のために近親者や自らを差し出さなければならないというあり方は、人質を担保とした信用取引とかさなりあっている。

この再解釈にみられるグレーバーの構想力の高さには驚くほかない。グイヤーまでの研究者たちは、ティヴの経済を宗教や政治と関連づけて把握するようなことはなかった。また、隣接した地域の同時代の事例を負債という観点で結びつけて捉えるという発想も、それ以前の研究にはみられないものであった。

他方で、グイヤーにしても、グレーバーにしても、ボハナンの卓越した民族誌を基盤としつつも、その後の歴史研究を十分に踏まえた再整理をおこなうことで、新たな貢献をしているところは見逃すことができない。既存の研究を踏まえて、グイヤーは理論の精緻化(「転換」概念の新たな定義の提示)をおこない、グレーバーは新たな理論の提示(負債によるティヴの経済の変動の説明)をおこなっている。ここに人類学における研究の蓄積と理論の発展のあり方をみることができよう。

しかし、一方で、一連のティヴの経済をめぐる研究において、理論とはどのようなものであり、何が新しく示され、何が蓄積として引き継がれたのであろうか。次章では、こうした点を論じながら、人類学における理論と研究の蓄積について述べる。

III 人類学における理論と研究の蓄積

第2章でみたように、ティヴの(植民地経済以前の)経済についての研究は、ボハナンの研究以後も蓄積し、進展することになった。他方で、こうした研究は、独自の理論の精緻化を伴ったものである。他方で、ボハナンも含め、ティヴの経済についての一連の研究は——すべてではないものの——いくつかの理論のタイプを共通して含んでいる。理論のすべての問題を検討することはできないが、ここでは歴史観と概念という理論について、それぞれ検討をおこなう。

1 歴史観

まず、グイヤーを除く、すべての論者たちは、ある種の歴史観を前提としている、あるいは歴史観を示そうとしている。ボハナンにおいては明白である。ボハナンは明確に、「伝統的な経済」が貨幣を伴う市場経済によって変容したという歴史観を前提にしていた。それがゆえに、ラタムとドルワードは個別の論点のみならず、こうした歴史観を大きく批判していた。ラタムとドルワードは、アフリカにおける経済発展が他の地域と同様の市場経済の原理によって進展したという歴史観を共有していた。他方で、グレーバーは——あまりにも長大になるのでその詳細は省略するが——（人間の創造・破壊・再編成に重きをおく）人間経済から（富の蓄積に重きをおく）市場経済への転換という人類史の流れのなかで、人間経済がその論理を押し進めた結果、人間経済事態を破綻させる奴隷制を生みだしていった事例として、ティヴの経済を位置づけている。こうした歴史観は、ティヴの経済という事例を、より長い歴史のなかに位置づけて説明するという点で、ある種の理論と呼ぶうるものである。

そのうえで、重要な点は、歴史観が根本的に変化したとしても、すべての民族誌的記述の価値が失われる、というわけではない、ということである。ボハナンは、真鍮棒が分割可能であったことや、綿布が貨幣として用いられていたことについて、まったく知らなかった、あるいは記述に反映することはなかった。そのため、「原始貨幣」しか存在しない「伝統的な経済」というイメージと、そのイメージに付随する歴史観に固執してしまったとはいえるだろう。しかし、交換の領域のモデルは——その強調点が反転したものの——生き残ることとなった。

そもそも、3つの交換の領域には、例外的にその領域をまたぐものがあることは、ボハナン自身が書きとめていたことでもあり、その例外は当初から必ずしもボハナンの提示した歴史観とかみ合っていなかったといえるだろう。3つの交換の領域とその領域を超えないようにする道徳が「伝統的な経済」であったとするにもかかわらず、それをまたぐ例外的な交換が「伝統的な経済」のなかに含まれているということは整合性に欠いている。それがゆえに、ボハナンは、この領域をまたいで交換される真鍮棒を限定目的貨幣とすることで、自らの歴史観と例外の存在を調停しようとしたといえるかもしれない (Bohannon 1959a)。ラタムが、真鍮棒を限定目的貨幣と捉えることについて、強く批

判していたことも (Latham 1971)、このように考えれば、よりの確に理解できる。正確に読めば、ラタムもドルワードも、3つの交換の領域についての批判をおこなっているわけではなく、領域をまたいで交換がなされる真鍮棒と綿布の存在を指摘している。そうしたことから、グイヤーが、ボハナンとその後の研究の統合をしたように、ボハナンの民族誌的記述のすべてが否定されたわけではなかったのである。

それでは、この歴史観としての理論は、どのような働きをしているのだろうか。第一に、歴史観は、他の事例と連続したものとして、説明されるべき事例を位置づけている。ボハナンの場合、「伝統的な経済」が市場経済によって失われるという歴史観として、ティヴにおける3つの交換の領域を提示することで、「市場経済以前の」「伝統的な経済」の他の事例と連続的に捉えることを可能とした。実際のところ、実体主義のなかで、ティヴの経済はそのように位置づけられ、論じられることとなった (e.g., Dalton 1961; Douglas 1967)。これは、ラタムとドルワードにおいても同様であり、西アフリカの経済史研究において、サハラ以南アフリカの植民地統治以前の貨幣の発展の歴史のなかで論じられたり、あるいは自ら位置づけたりしていた (Hopkins 1973: 69–70; Dorward 1976: 576–577)。グレーバーについても同様であり、『負債論』でとりあげられる膨大な事例のなかに、ティヴの経済が位置づけられている (e.g., グレーバー 2016: 514–515)。つまり、理論としての歴史観は、その歴史観の枠組みのなかで、他の事例と結びつけて説明することを可能にさせている。

他方で、第二に、歴史観は、事例のなかの民族誌的記述について、その一部を強調するように作用するが、民族誌的記述のすべてをその歴史観の説明の枠組みにはめ込むものではなかった。ボハナンは交換の領域の保守性を強調したのだが、ラタムとドルワードは真鍮棒や綿布の貨幣としての側面と地域間交易の重要性、グレーバーはツァヴと「人肉負債」を強調し、それぞれの歴史観に適合的な説明をおこなっている。このような強調点の移行は、歴史観の転換／提示に付随するものであるが、逆にいえば、歴史観の転換／提示は強調点を移行させるだけであるともいえる。結局のところ、歴史観の転換／提示は、その歴史観の枠組みのなかで、他の事例と結びつけやすい民族誌的記述を強調することで、それ以前の研究の歴史観とは異なる結びつきを生みだしている、ともいえるだろう。

このように、理論としての歴史観は、他の事例との結びつけた説明と、その説明に必要とされる強調点の移行を含みこむものであった。しかし、ここで強調したいことは、単に強調点を移行させているがゆえに、理論としての歴史観が無意味であると主張しているわけではない。強調点の移行によって、それまで結びつけて説明されてこなかった事例との連続性をもった指摘は、新たな説明を生みだしているという点で創造的な営みであり、その点において、学術的に価値があるといえる。他方で、それは既存の研究を無価値にするものではないといえるだろう。

2 概念

つぎに、ティヴの経済についての研究に共通している理論のタイプは、概念による説明である。こうした概念は、ティヴの経済のすべてを説明することはないが、それを説明する際に不可欠な要素となっている。

概念という点では、ボハナンの最も重要な理論的貢献は、交換の領域という概念を示したことにある。ボハナンの記述を注意深く読めば理解できるのだが、交換の領域は実のところ、ティヴの人びとが語っているものではない (Bohannan 1955: 62-64)。ボハナンは論文のなかでいくつもの民俗語彙に言及しているが、交換の領域や3つの領域に対応する語彙は示していない。グイヤーが指摘するように、3つの交換の領域は「認知のうえで分別された特徴に基礎をおくものではない」(Guyer 2004: 27)。つまり、3つの交換の領域は、ティヴの社会のなかで明確に言語化されていない。したがって、交換の領域とは、人びとの行為のなかで、3つの交換の領域をまたいだもののやりとりがまればあることを基礎として、ボハナンによってまとめられた「社会科学のツールキットのなかの概念」(Guyer 2004: 28)である。

こうしたボハナンの記述と分析のあり方は、人類学の理論について述べた彼の小論のなかで示されている (Bohannan 1959b)。そこでは、ボハナンは、事象に対するローカルな社会のなかでの説明のあり方を理解したうえで、それらを再整理することで、人類学の理論となるという主張をおこなっている。つまり、対象となる社会の人びとの説明をそのまま採用するのではなく、それを再整理し、組織化して説明することが人類学の理論であるということになる。この点については、さまざまな立場があり、多くの議論がなされているところであるが、その議論には踏み込まない。ここでは、

ボハナンは民族誌的記述を組織化するために概念をつくりあげ、それによって説明をおこなったということを確認するにとどめておきたい。

ボハナンのように、自ら概念をつくりだしたわけではないが、ラタムとドルワードもまた、説明のキーとなる経済学の概念を用いている。ラタムは、信用取引、流動性、ドルワードは価格弾力性などをキー概念として、事例の説明をおこなっている。これらの概念を用いつつ、彼らがおこなっていることは、ティヴや周辺地域の人びとが経済合理性をもって行動しているという説明である。

グイヤーやグレーバーの説明では、概念の役割はより明確でわかりやすい。グイヤーは、ボハナンとその後の経済史研究の成果を整理することで、「転換」概念を再定義し、再定義した「転換」概念を他の事例へとあてはめていく。「転換」に関連する事象を整理することで、ボハナンが述べておらず、かつ「転換」に含まれる意味内容を抽象化し、「転換」概念に加えたことが、グイヤーのおこなった理論的な貢献である。他方で、グレーバーは、負債をキー概念として、負債の極端なカタチとして、奴隷制を位置づけ、その具体的なあり方を、ティヴとクロスリバー地域の民族誌や歴史研究から示している。つまり、事例によって、負債の具体的な意味内容を増やしている。

一方では概念によって事例を説明し(民族誌的記述の組織化をおこない)、他方では事例(の整理)によって概念の意味内容の拡張をおこなう、ということがなされている。そして、こうした概念は、他の事例の説明に用いられ、あるいは他の事例によって意味内容の拡張がおこなわれたりすることで研究が進展する、ということになる。こうした概念によっても、民族誌的記述のなかで強調される内容が異なってくる。グイヤーのように「転換」をキー概念とすれば、異なる価値体系のなかでのものの取引に焦点があたるようになり、グレーバーのように負債をキー概念とすれば、「人肉負債」に焦点化されて、それに付随する民族誌的記述が説明のために組織化される。新たな概念による説明の組織化は、それまでの説明とは異なるカタチで民族誌的記述を配置するようにすることも言い換えることができるだろう。

3 人類学における理論と研究の蓄積について

ここまで歴史観と概念の2点でみてきたように、理論の変化は、民族誌的記述の強調点の変化として捉え

られることを確認してきた。たしかに、ラタムやドルワードの研究は、真鍮棒が分割可能であったという点でボハナンの民族誌的記述の誤りを訂正し、綿布が植民地統治直前までは貨幣として用いられていたことなどのボハナンが記述していなかった情報を付加させた。しかし、そうした訂正や情報の付加は、ボハナンによる大部分の民族誌的記述の妥当性を損ねるものではなかった。

むしろ、大きな問題は、ボハナンの歴史観にあり、冷静にみれば、ラタムとドルワードは、周辺情報を大幅に付加することによって、その歴史観の訂正をおこなったとみることができる。他方で、グレーバーが『負債論』で示したように、ラタムとドルワードの依拠した歴史観——西アフリカにおける経済発展の物語——とは異なる歴史観も提示可能なものとなっている。そうした歴史観の変化は、先行研究では参照されていない民族誌的記述に焦点をあてたり、あるいは参照されているが異なる点に強調がおかれたりするような変化である。これらの点は、説明においてキーとなる概念においても同様である。そこでなされていることは、キー概念によって組織化される民族誌的記述の変化である。つまり、歴史観や概念としての理論とは、民族誌的記述の配置を編成するものであるといえる。

このように本稿でとりあげたティヴの経済の研究史においては、歴史観と概念という理論は新たなものになることで、強調・言及する民族誌的記述の範囲が変容している。また、その変容に伴って新たな一次資料による民族誌的記述が付加されている。さらに、そうした既存の民族誌的記述の再整理から概念の拡張がなされる。そうしたことが、人類学における理論と研究の蓄積といえるだろう。新たな理論によって、それまでの民族誌的記述が無価値になるということはないのである。

他方で、本稿でとりあげたティヴの経済の事例が「歴史」であり、多くの人類学は「現在」を扱っているがゆえに、本稿でみた研究の蓄積が他の人類学にはあてはまらないのではないかと、という指摘はありうるだろう。たしかに、研究史をふりかえるにあたっては、対象が「歴史」となっている場合のほうが、研究の蓄積がわかりやすい。

しかし、「現在」を対象にしたとしても、根本的には人類学は理論の名の下に、民族誌的記述の強調点（とりあげるべき内容）を設定し、その記述の組織化をおこなっているように思われる。結局のところ、民族誌

的記述を抜きにした人類学は、「哲学的」な考察に終始せざるをえない。過去の民族誌であれ、観察や聞き取りの成果であれ、歴史的な史料であれ、過去や現在の物質文化であれ、人類学は何らかのかたちで民族誌的記述を説明する必要がある、その説明の際に、民族誌的記述の組織化がおこなわれる。

このように考えると、繰り返される「転回」や次々に登場する新たな概念が、既存の民族誌的記述の強調点や組織化という点で、どのような変更をもたらしたのかを注視することによって、人類学における研究の蓄積が捉えやすくなるといえるだろう。逆にいえば、既存の理論が、民族誌的記述のどの箇所に強調点をおき、どのように組織化をおこなっているのかを精査することで、そうした理論が見過ごしていた民族誌的記述の範囲や組織化の方法を明らかにすることができるのかもしれない。

本稿では、ティヴの経済についての研究史をみてきたが、ボハナン、ラタムとドルワード、グイヤーとグレーバーは、それぞれにおいて、傑出した研究をおこなっていた。それぞれが新たな論点に光をあて、ティヴの経済への理解を増やしていった。彼ら、彼女らの研究の方法は、それぞれにおいて、ある種の模範を示している。一般的に、人類学の学説史は、理論の「乗り越え」、ないしは理論の並列による記述となっているが、本稿で示したように、特定の対象をめぐる研究史としてもまとめられることができる。本稿で提示したことは、そのような人類学のあり方でもあった。

IV 結論

本稿では、ティヴの経済についての研究史を題材として、人類学における理論と研究の蓄積について述べてきた。具体的には、ティヴの経済を扱ったボハナンとそれ以降の研究について、個々の研究の叙述をまとめたうえで、理論の変遷を辿るのではなく、民族誌的な記述がどのような点で批判され、あるいは再解釈されたのかに焦点をあてて、歴史観と概念という2点の理論についての検討をおこなった。それらの検討から、歴史観と概念という理論は新たなものになることで、強調・言及する民族誌的記述の範囲が変容していること、その変容に伴って新たな一次資料による民族誌的記述が付加されること、そして、そうした既存の民族誌的記述の再整理から概念の拡張がなされることを明らかにした。最後に、これらの含意として、既存の民

族誌的記述の強調点や組織化という点での変更をおさえることで、新たな理論として提示される概念や歴史観が、どのような意味において新しいのかを明らかにしうることを述べた。

もちろん、本章であつかった歴史観と概念以外にも、本稿の冒頭でまとめた、観察・記述、法則についての論点についても検討の余地がある。観察・記述については、いわゆる史料批判が問題となる。民族誌的記述がどのような観察や記録の方法にもとづいているのか、どのような種類の史資料によって、どのように「事実」を確定しているのかという点が問題になるだろう。また、法則については、より根本的で、形而上学的な内容を含んでいる。そもそも、社会的な事象についての説明とは何であるのか、規則性をもつ法則／ナラティブによって歴史的／社会的な事象の説明がどのように可能であるのかどうか、などの点は、さまざまな立場があり、議論が継続している (e.g., 伊勢田 2009; 保城 2014; 苗村 2019)。これらは、本章で扱ってきた歴史観や概念の位置づけとも結びつけて論じる必要のある事柄である。しかし、これらは本稿でなしうることを大きく超えている。人類学における理論が、どのように事象を説明しうるのか。この足下の議論も、具体的な事例を通して検討することが必要とされている。

参照文献

(日本語文献)

アバデュライ、アルジュン

- 2004 『さまよえる近代——グローバル化の文化研究』 門田健一 (訳)、平凡社。

伊勢田 哲治

- 2009 「歴史科学における因果性と法則性」『岩波講座 11 歴史／物語の哲学』 飯田隆 (編)、pp. 95-119、岩波書店。

ウォーラーステイン、イマニュエル

- 1981 『近代世界システム——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立 (1・2)』 川北稔 (訳)、岩波書店。

クリフォード、ジェームズ マーカス、ジャージ (編)

- 1996 『文化を書く』 春日直樹・足羽與志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇悦子 (訳)、紀伊國屋書店。

グレーバー、デイヴィッド

- 2016 『負債論——貨幣と暴力の5000年』 酒井隆史 (監訳)、高祖岩三郎・佐々木夏子 (訳)、以文社。

スバルベル、ダン

- 2001 『表象は感染する——文化への自然主義的アプ

ローチ』 菅野盾樹 (訳)、新曜社。

高橋 玲

- 2016 「地域社会における偏倚的实践と正統性の変革——R. ファース, J. A. シュムペーター, C. ギアツ, P. ブルデューと経済人類学」『大阪産業大学経済論集』 18(1): 57-79.

出口 顕

- 2003 「〈特集〉人類学の方法としての比較の再検討: 序にかえて」『民族学研究』 68(2): 214-225.

中尾 世治

- 2020 「国際ワークショップ「西アフリカにおける貨幣: 商品から植民地通貨への転換についての経済・社会史」参加報告」『アフリカ研究』 97: 55-58.

中川 敏

- 1992 『異文化の語り方: あるいは猫好きのための人類学入門』 世界思想社。

苗村 弘太郎

- 2019 「物語的説明モデルの原型としてのヘンペルモデル」『科学哲学科学史研究』 13: 1-16.

浜本 満

- 2001 『秩序の方法——ケニア海岸地方の日常生活における儀礼的实践と語り』 弘文堂。

ハン、クリス キース、ハート

- 2017 『経済人類学——人間の経済に向けて』 深田淳太郎・上村淳志 (訳)、水声社。

保城 広至

- 2014 『歴史から理論を創造する方法——社会科学と歴史学を統合する』 勁草書房。

ホブズボウム、エリック レンジャー、テレンス

- 1992 『創られた伝統』 前川啓治ほか (訳)、紀伊國屋書店。

マーカス、ジョージ フィッシャー、マイケル

- 1989 『文化批判としての人類学——人間科学における実験的試み』 永淵康之 (訳)、紀伊國屋書店。

前田 泰樹・水川 喜文・岡田 光弘 (編)

- 2007 『ワードマップ エスノメソロジー——人びとの実践から学ぶ』 新曜社。

森 正人

- 2009 「言葉と物——英語圏人文地理学における文化論的転回以後の展開」『人文地理』 61(1): 1-22.

ラトゥール、ブリュノ

- 2019 『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』 伊藤嘉高 (訳)、法政大学出版局。

(英語文献)

Athanasidou, Athena, Pothiti Hantzaroula, and Kostas Yannakopoulos

- 2008 Towards a new epistemology: the “affective turn”. *Historein* 8: 5-16.

Bohannon, Paul

- 1955 Some principles of exchange and investment among

- the Tiv. *American Anthropologist* 57(1): 60–70.
- 1958 Extra-processual events in Tiv political institutions. *American Anthropologist* 60(1): 1–12.
- 1959a The impact of money on an African subsistence economy. *The Journal of Economic History* 19(4): 491–503.
- 1959b Anthropological theories. *Science* 129(3345): 292–294.
- Bohannon, Paul, and Laura Bohannon
- 1968 *Tiv economy*. Evanston: Northwestern University Press.
- Boyer, Pascal, and Brian Bergstrom
- 2008 Evolutionary perspectives on religion. *Annual review of anthropology* 37: 111–130.
- Çalışkan, Koray, and Michel Callon
- 2009 Economization, part 1: shifting attention from the economy towards processes of economization. *Economy and society* 38(3): 369–398.
- Cosgrove, Denis, and Peter Jackson
- 1987 New directions in cultural geography. *Area* 19(2): 95–101.
- Dalton, George
- 1961 Economic theory and primitive society. *American anthropologist* 63(1): 1–25.
- 1965 Primitive Money. *American Anthropologist* 67(1): 44–65.
- Dorward, David
- 1976 Precolonial Tiv trade and cloth currency. *The international Journal of African historical studies* 9(4): 576–591.
- Douglas, Mary
- 1967 Primitive Rationing: A Study in Controlled Exchange. In *Themes in Economic Anthropology*. Raymond Firth (ed.), pp. 119–147, London: Tavistock.
- Ellen, Roy
- 2010 Theories in anthropology and ‘anthropological theory’. *Journal of the Royal Anthropological Institute* 16(2): 387–404.
- Godelier, Maurice
- 1965 Objet et méthodes de l’anthropologie économique. *L’Homme* 5(3): 32–91.
- Graeber, David
- 2012 On social currencies and human economies: some notes on the violence of equivalence. *Social Anthropology* 20(4): 411–428.
- Grimshaw, Anna, and Amanda Ravetz
- 2015 The ethnographic turn—and after: a critical approach towards the realignment of art and anthropology. *Social Anthropology* 23(4): 418–434.
- Guyer, Jane
- 2004 *Marginal gains: monetary transactions in Atlantic Africa*. Cambridge: University of Chicago Press.
- 2012 Soft currencies, cash economies, new monies: Past and present. *Proceedings of the National Academy of Sciences* 109(7): 2214–2221.
- Hazard, Sonia
- 2013 The material turn in the study of religion. *Religion and Society* 4(1): 58–78.
- Hobson, Nicholas, Schroeder, Juliana, Risen, Jane, Xygalatas, Dimitris, and Michael Inzlicht
- 2018 The psychology of rituals: An integrative review and process-based framework. *Personality and Social Psychology Review* 22(3): 260–284.
- Holbraad, Martin, and Morten Axel Pedersen
- 2017 *The ontological turn: an anthropological exposition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopkins, Antony
- 1973 *An Economic History of West Africa*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Knott, Kim
- 2010 Religion, space, and place: The spatial turn in research on religion. *Religion and Society* 1(1): 29–43.
- Kohn, Eduardo
- 2015 Anthropology of ontologies. *Annual Review of Anthropology* 44: 311–327.
- Latham, Anthony John Heaton
- 1971 Currency, credit and capitalism on the Cross River in the pre-colonial era. *The Journal of African History* 12(4): 599–605.
- Laviolette, Patrick
- 2020 Mana and Māori culture: Raymond Firth’s pre-Tikopia years. *History and Anthropology* 31(3): 393–409.
- Maurer, Bill
- 2006 The anthropology of money. *Annual Review of Anthropology* 35: 15–36.
- Moore, Henrietta
- 2004 Global anxieties: concept-metaphors and pre-theoretical commitments in anthropology. *Anthropological theory* 4(1): 71–88.
- Nakao, Seiji
- 2019 Monetary Marginality and Multiple-Currency in the Colonial Situation: Monetary Transition from the Cowry to the Franc in Upper Volta. International Workshop for the Economic History of Africa. The Paper presented at the Workshop “Money in Africa: The economic and social history of the transitions from commodity to colonial currencies.” 17 December 2019. University of Cambridge.
- Ortner, Sherry
- 1984 Theory in Anthropology since the Sixties. *Comparative studies in society and history* 26(1): 126–166.
- Pallaver, Karin
- 2022 Introduction: Money, Colonialism and African Societies. In *Monetary Transitions: Currencies, Colonialism,*

and *African Societies*. Karin Pallaver (ed.), pp. 1–28.
Cham: Palgrave Macmillan.

Critique of Anthropology 7(1): 33–47.

Venkatesh, Sudhir Alladi

Scholte, Bob

2013 The reflexive turn: The rise of first-person ethnography. *The Sociological Quarterly* 54(1): 3–8.

1987 The Literary Turn in Contemporary Anthropology.

Continuity and Change of Theories and Studies in Anthropology:

An Examination of the History of Studies of the Economy of Tiv

Seiji NAKAO*

Since the 1980s, anthropology and related disciplines have put forward various (institutional, cultural, affective, spatial, reflexive, ethnological, ontological etc.) “turns,” emphasizing the disconnection rather than the continuity of studies. If the “turns” were frequent, the study would not result in any continuity, and anthropology could only offer the short-term trends of humanities. However, not all anthropological studies have been consumed as “providers” of ethnographic examples for trending theories. Instead, some studies have sophisticated theories and collected more ethnographic descriptions over the long-term years.

This paper shows how the theories and studies in anthropology have been sophisticated and accumulated, using the history of the study on the (pre-colonial) economy of Tiv. We summarize the narratives of each study, from the classical works of Bohannan to Graeber on the economy of Tiv. In this review, we do not narrate the history of “overcoming” by “new” theories, but instead focus on the use and disuse of the ethnographic descriptions in each study. Based on this careful review, we clarify that “new theories” did not deny all the ethnographic descriptions in the classical works contrary to their insistence. Rather, the changes have appeared in the emphasis and the range of use in the ethnographic descriptions. In other words, new theories require changes in the range of the use of ethnographic descriptions and the points of emphasis. Finally, we propose a way to detect what is novel or fresh in the “new” theories by careful attention to the emphasis and the range of use of the ethnographic descriptions.

Keywords

Theory in Anthropology, Economic Anthropology, Tiv, Graeber, debt

* Graduate School, The University of Kyoto